

原著論文

音楽に関わる科目間連携の試み その1

The First Step of Cooperation of Subjects on Music for Child Education Majors

川口 潤子 (白百合女子大学) ・ 杉本 明 (白百合女子大学)
Junko Kawaguchi (Shirayuri University) Akira Sugimoto (Shirayuri University)

土橋 久美子 (白百合女子大学) ・ 三ッ本 晴彦 (白百合女子大学)
Kumiko Dobashi (Shirayuri University) Haruhiko Mitumoto (Shirayuri University)

本稿は、2016年4月に開設した白百合女子大学人間総合学部初等教育学科における音楽に関わる科目間連携についての研究である。この科目間連携は、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「小学校学習指導要領」が求める方向性に基づいて実施するものである。

今回は、現在のカリキュラムにおいて開講されている6つの科目間の連携の現状を明らかにするとともに、今後の課題と対応について検討した。

今年度において、著者らは、学生たちに、一度身につけた技能を複数の科目において繰り返す機会を与えることによってその技能を定着させ、学びを深めさせることを試みた。情報共有により、それぞれの科目を担当する教員の「連携」に対する意識は高まりつつある。今後の課題として、幼稚園や保育所における保育内容である5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）に関わる科目とのさらなる連携の可能性を探ることなどが挙げられる。

1. はじめに

今日において、教育の質を高め、学生の成長を保証していくための組織的な取り組みの一つに、科目間連携が挙げられる。

本稿では、白百合女子大学人間総合学部初等教育学科（以下、「本学初等教育学科」とする。）における音楽に関わる科目間連携について取り上げる。この連携は、平成29年告示の「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「小学校学習指導要領」が求める方向性に基づくもので、2018年度の本学初等教育学科の学生を対象とする必修科目として開講された「音楽」「初等音楽科指導法」「保育内容演習（表現）」「教育実習（幼・小）事前事後指導」および、選択科目として開講された「音楽演習（器楽）」「音楽演習（合唱）」〈表1参照〉の科目間において試みられたものである。

2. 研究の背景と目的

限られた授業時間の中で、学生が将来の教育現場における諸場面での音楽的な活動に、充分に対応し得る技能を習得することは、容易ではない。この状況を乗り切るためには、音楽教育に関わる複数の教員が積極的に連携しあい、効果的・効率的な指導を行う必要がある。

また、学生たちが、現場に出た時に、身につけた音楽的技能を用いて、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「小学校学習指導要領」の理念を実現するイメージを持つためには、5領域を含む周辺領域科目の教員との連携

による指導も必要であると考えられる。

本研究では、音楽に関わる本学初等教育学科の科目間連携の現状を明らかにするとともに、今後の課題と対応について検討する。

表1. 連携科目と指導内容

受講年次	履修コース		選択・必修	科目名	指導要領	指導法	弾き歌い	遊び歌	言語表現教材	リトミック	合唱	楽器活動	ソルフェージュ
1年次	児	幼	必修	音楽	川		川	川				川	川
2年次	児	一	必修	初等音楽教育法	杉	杉	杉			杉		杉	杉
3年次	一	幼	必修	保育内容演習(表現)	川	川		川				川	
	一	幼	必修	教育実習(幼・小)事前事後指導	土		土	土	土				
全学年	児	幼	選択	音楽演習(器楽)			三						三
	児	幼	選択	音楽演習(合唱)							三	三	三

※児童教育コース……児, 幼児教育コース……幼, と表記している。

※川口担当……川, 杉本担当……杉, 土橋担当……土, 三ツ本担当……三, と表記している。

3. 音楽に関する科目間連携の現状

ここで取り上げる6つの科目は、4人の担当教員によって開講している授業である。2018年度における、それぞれの科目の概要と他科目との連携についての現状を、科目ごとに述べる。

3-1 「音楽」(1年次必修/児童教育コース・幼児教育コース/川口担当)

科目「音楽」では、子どもたちが、興味・関心をもって楽しく音楽に取り組むことができるよう、「子どもの音楽表現」の捉え方についての理解を深めながら、歌あそびや楽器活動などの指導に必要な弾き歌いや楽器奏法の技術や理論を学ぶ。初等教育学科の必修科目としては、4年間を通してピアノの弾き歌いの指導に、最も多くの時間を割く授業である。

季節の歌や、小学校1・2年向けの歌唱教材を弾き歌い課題曲とし、小学校教科書に記載されている「音符、休符、記号や用語」の読み方も指導している。

<他科目との連携>

- ①弾き歌いや遊び歌、集団での楽器活動などを通して、教育・保育現場のイメージが持てるよう、幼稚園や保育所における保育内容である5領域や、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」とのつながりに気づかせるよう心がけた。
- ②弾き歌いの課題は、本授業で習得が終わるわけではなく、下記のとおり、2年次以降も他の授業において継続することを説明した。
 - ・児童教育コースの学生：2年次「初等音楽科指導法」の授業で、この授業で学んだ「弾き歌い」「記号・用語」を用いた指導法を学ぶ。
 - ・幼児教育コースの学生：3年次「教育実習(幼・小)事前事後指導」の授業で、「ピアノ弾き歌い課題10曲発表会」が実施される予定である。
 - ・両コースの学生：「教育実習」「保育所実習」で、「現場の子どもたちの前」で弾き歌いする可能性がある。

3-2 「初等音楽科指導法」(2年次必修/児童教育コース/杉本担当)

科目「初等音楽科指導法」は、小学校学習指導要領音楽科の目標を実現するために必要とされる音楽的知識・技能及び指導法を身につけることを目的とする。特に教育課程一般に関する専門的な知識の修得、さらに今日の教育課題である児童の意欲・興味・関心の向上と音楽表現の指導を合わせて授業を進めるにはどうしたらよいかを考える。また、指導の対象である児童の能力や状態を的確に判断し、その状況に相応しい指導法を採り、幅広い音楽活動の指導ができる教師となるよう、教材研究、学習指導案作成、模擬授業を通して学んでいく。

本講義では、現行の小学校学習指導要領・音楽の趣旨理解を基礎・基本として授業を進める。さらに小学校という職場にふさわしい人格・態度・服装・コミュニケーション能力の指導も具体的に行う。他の学生の模擬授業からの学び、また、自分の授業に対する反省、他の学生の模擬授業からの学びを自分の言葉で伝える力の育ちを大切に考えている。

<他科目との連携>

「音楽」の授業と連携し、学生自らが行う模擬授業において、1年次で既に練習した、小学校1・2年生の共通歌唱教材8曲の弾き歌いをしたり、それらの曲を使って模擬授業をしたりする機会を設けている。また、同じく「音楽」の授業で学んだ「音符、休符、記号や用語」を復習し、より実践的な活動の中で理解が深められるよう指導している。

小学校低学年の学びは、ゼロからスタートするのではなく、幼児教育で身に付けたことを生かしながら教科等の学びにつなぎ、子どもたちの資質・能力を伸ばしていく時期であることを伝え、2020年度から実施される小学校の「学習指導要領」の目玉とも言える「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)をキーワードに、1年次の「音楽」での学びを確認しながら、幼小連携の必要性にも触れている。その他、教員採用試験を受ける学生が、平行して「音楽演習(器楽)」や「音楽演習(合唱)」を履修することにより、受験に備えるといった事例も見うけられる。

<実践例>

「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)は、さまざまな「学び」から物事を大きく捉える視野を形成し、「どのように考えてその考えを実行するのか」につながっていく。これは、音楽教育にとっても必要不可欠なことである。

そこで本稿では「初等音楽科指導法」の授業でも扱っている、小学校1年生の共通教材である文部省唱歌、『うみ』(林 柳波 作詞/井上 武士 作曲)を教材として、「主体的・対話的で深い学び」をするきっかけを作り出し、「想像したことを創造する力」に結びつける指導案の一部を提示することとした。

今回、『うみ』は、6時間をかけて指導を行う設定としている。

指導案(表2)は、前回(3時間目)の授業において、この歌の「うみ」を想像し、さらに「波の動き」を2人で表現することを行った後の<<部分指導案(4時間目)>>である。前回(3時間目)は小学校1年生の発達段階を考慮し、動きの例を教師が示し、動きのリズムを♪(付点二分音符)・♪(四分音符)・♪(八分音符)の3種類に限定して行い、本時を開始している。

本時は、リトミックの活動でよく用いられる「複リズム」(2つ以上のリズムを同時に表現すること)を行い、歌いながらリズムを打つ練習をし、次時(5時間目)に学生が行う「教師の提示した動きではない波の動きを、2人で創って歌いながら動く」という活動につながるよう配慮している。

子どもたちにとって音楽における重要な要素「テンポとリズム」をしっかりと感じ取り表現することは、とても大切なことである。子どもたちはゲーム的な感覚の中で自然にテンポとリズムを感じ取り、主体的に楽曲表現に取り組むことができるようになる。さらに、海の波を「大(♪)・中(♪)・小(♪)」というように、イメージとリズムを一致させて動くことで<2人がどのように動いたらよいか>という対話が生まれ、お互いの意見を尊重しながら動きを創り出していくことになるのである。

音楽教育における「主体的・対話的で深い学び」とは、さまざまな捉え方が可能ではあるが、子どもたちが想像力を働かせて生き生きと創造する音楽活動には、演奏表現の前にこのような「身体表現を伴ったリズム活動」が必要であると言えるだろう。そして、その活動によって子どもたちが持っているさまざまな能力が引き

出され、音楽表現だけではなく、社会生活を上手に営むことにもつながっていく能力の一つである「創造的想像力」が培われていくことにもなると考える。

この授業では、学生が、このようなねらいを持つ指導案の内容を実際に体験することによって、子どもたちと共に音楽を感じ、対話を通して創造的な表現に取り組む感性を身につけることを目指している。

表2. 科目「初等音楽科指導法」で学生に提示した小学校1年校対象の部分指導案（6時間設定の4時間目）

部分指導案 {うみ}	
本時の学習指導（4/6時）	
(1) 目標 うたいながらリズムを打つことができる（複リズムの導入）	
(2) 教材 <ことばでリズム> <うみ>	
学習活動	教師の手立てと工夫
① 既習した<ことばでリズム>を行って学習の雰囲気をつくる。	○子どもの工夫する力を積極的に取り上げ、創作意欲を高める。
② 前回の<うみ>の2人組になり♪、♪♪♪、♪♪♪♪♪の3種類の波の動きを思い出して表現してみる。	○しっかりと音価を打っているか、強弱を表しているかを確認する。
③ <うみ>を3番まで教師との交互唱でうたう。 本時のめあてをつかむ。 今日は波の3つのリズムをつなげてみましょう。 まずは先生がつくってみます。	○少しゆっくりと、交互唱しながら歌詞の意味を考えながらうたうように促す。 ○まず、教師が作ったリズムを打ってみる。 
④ 今の2人組で、3つのリズムのうち2つを選んで、そのリズムをつなげて手を打ってみましょう。 ○リズムが決まったら、2人でリズムを打つ練習をする。 ○リズムが打てるようになったら、1番をうたいながらリズムを打つ練習をする。 ○2人ずつ発表する。	○2人できちんとリズムを打てることができるように、それぞれのペアを回りながらサポートする。 ○評価：歌と同じ速さで2人が同じリズムを打っている。（評価基準 ア）
⑤ 学習を振り返り、次時の活動を確認する。 ・友達と速さを合わせてリズム打ちながらしっかりうたえたね。 ・次の授業では、このリズムを使って波の動きを作ってみましょう。	○次時に向けての意欲を高めるために、個々のよさや今日の伸びを大いにほめる。

3-3 「保育内容演習（表現）」（3年次必修／幼児教育コース／川口担当）

科目「保育内容（表現）」は、幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、領域「表現」のねらい及び内容を理解し、他領域との関連性や小学校の教科等とのつながりを知ることが目的である。

授業では、音楽活動のみならず造形活動の演習なども行う。幼児の認識や思考、動き等を視野に入れた保育の構造の重要性を理解し、指導案の作成、模擬保育も行う。

<他科目との連携>

「教育実習（幼・小）事前事後指導」での学びとのつながりを伝えるようにしている。「あそび歌」については、1年次の「音楽」で学んだ教材を復習しつつも、新しい教材にも触れられるよう配慮している。模擬保育では、それらを指導案の中に組み入れ、子どもたちの前で行うことを想定して学生が発表しあうこととしている。

3-4 「教育実習（幼・小）事前事後指導」（3年次必修／幼児教育コース／土橋担当）

科目「教育実習（幼・小）事前事後指導」では、幼稚園実習に向けて、実習に必要なスキルを積むための授業展開を行っている。保育現場での実習で求められることは、日誌や指導案を書く力もあるが、実技の面も多い。実技は、絵本や紙芝居の読み聞かせや、歌に合わせた手遊び、ペープサートやパネルシアターなどの実演

など多岐に渡っている。学生は3年生まで様々な授業で、実技面の学習をしている。しかし、授業ごとで内容が完結しているために、学生が自分の課題を継続的に意識しながら学ぶ機会が少ない。「教育実習（幼・小）事前事後指導」（以下、「教育実習指導」とする。）の授業が始まり、実習での実技面の重要性を目の当たりにすると、自分の実技力不足に悩み始め、個人面談などにおいて不安を訴えるなどの姿が多くなるのが実情である。

<他科目との連携>

そこで実技面の強化をはかるため、特に音楽的な演習を取り入れている。（表3参照）

表3. 科目「教育実習（幼・小）事前事後指導」に取り入れている音楽的な演習項目

音楽的な演習	内容
・保育実技 [10分間のお楽しみ発表 (模擬保育)]	ペープサート、パネルシアター、パペット、エプロンシアター等、視覚的な言語表現教材を自ら作成し、10分間子どもの前で行うものを考え、模擬保育を行う。その際、発表の流れを示した模擬保育実践案（図1参照）も作成する。
・保育実技 [ピアノ課題（弾き歌い） 発表]	自分がピアノで弾くことのできる曲を10曲選び、練習する。後期の授業時に、その10曲の中から2曲を教員が選択し、学生が弾く。49人の学生を3グループに分け、ピアノ練習室3室用い、順番にピアノ発表をする。他の学生が発表している間は聞き役になり、ピアノを弾いている様子を観察する。

図1. 模擬保育実践案のフォーマット（実際は、A4版の用紙サイズ）

選んだ題材・内容	「 」	
選択理由		
場面設定	歳児向け	
時間	進め方	作品のイラスト
(導入)		
(展開)		留意点
(まとめ)		

<実践内容>

・保育実技 [10分間のお楽しみ発表（模擬保育）]

発表の導入と発表後の余韻を味わう時間も入れて10分間の設定で10分間のお楽しみ発表を行った。各学生はそれぞれ自分の得意分野や興味がある内容を選択し、言語表現教材（ペープサートを用いたクイズ・パネルシアターでの昔話・手作り紙芝居など）を作成する。発表では5人1グループで構成し、保育室での発表を想定した机や椅子の配置をして行った。子ども役の他の受講生の前に立ち、始めは恥ずかしそうにしていた学生の姿もあったが、作成してきた言語表現教材を用いて、堂々とうたったり、演じたりする姿が見られた（図2）。

幼稚園実習では子どもたちの前で焦らず、子どもたち全員に聞こえる大きさと堂々と話をしたり演じたりすることが求められる。そのためには、実際の環境を想定して演じる場面のイメージを思い浮かべながら発表することが必要である。この保育実技が、学生自身の課題点を見つけるきっかけにもなり、そして他の受講生の発表を見て新たなアイデアを見つけ、制作意欲が湧くということも考えられる。また発表に向けての準備をしっかり行うことの大切さも感じ、実習への自身の実技面の準備や心の準備も行うことができると考えられる。



図2. 模擬保育実践

保育実技では、〈図1〉のような発表者のセリフを入れた進め方の案を各自で書くことを課題としていたが、本来の幼稚園実習ではセリフは入れない「指導案」の提出を求められることが多い。詳細な指導案を書く内容を別の時間を設けて行っている。

・保育実技【ピアノ課題（弾き歌い）発表】

10曲という曲数に当初戸惑う学生の姿があった。そのため、自分が弾くことのできるものを学生自身で選曲し、練習期間をある程度確保できるようにした。〈表4〉は、学生が選曲したピアノ曲（弾き歌い）を難易度別に整理したものである。発表時は16人ほどの他の受講生が聴いている中での発表となり適度な緊張感の中で行われた。聴いている他の受講生が発表直前に励ましたり、発表後にあたたかい拍手や感想を伝えたりすることで多くの学生は自分の力を発揮してピアノ課題（弾き歌い）をクリアすることができていた。教員は、①最後まで止まらず弾けたか、②子ども役の学生の様子を見ながら弾くことができたか等、チェックポイントを決めて点数で評価する。聴き役の学生には「友だちの演奏を受けとめる態度で聴き一緒に小さな声でうたう」「賞（楽しくうたえていたで賞等）を選び授業の終わりに提出する」等の課題を出し、他の受講生の姿からの学びを意識できるようにした。当日、発表の緊張感から自分の力を発揮することができなかつた学生には、後日再発表の機会を設定した。

表4. 演奏されたピアノ曲（弾き歌い）

比較的易しい曲	やや難しい曲	難しい曲
かえるの合唱 ぶんぶんぶん メリーさんのひつじ ロンドン橋 ちょうちょう きらきらぼし	山の音楽家 どんぐりころころ やきいもグーチーパー かたつむり アビニョンの橋の上で おはよう おべんとう さようならのうた さよならのうた	さんぽ 大きな古時計 思い出のアルバム ちいさな世界 あわてんぼうのサンタクロース きのこ

前述のように、幼稚園現場で求められるのは、絵本や紙芝居の読み聞かせや歌に合わせた手遊び、ペープサートやパネルシアターなどの実演などの実技面が多い。大学の学びの中で、この実技面を修得していくためには、1年次からの音楽的な演習を十分に生かしていくことが重要である。「教育実習指導」の授業内で、保育実技として「10分間のお楽しみ発表」と「ピアノ課題発表（弾き歌い）」を行うことは、1年次からの自分の成果を確認し、新たな課題を見つけ出す機会となっている。幼稚園実習において、学生に求められるスキルは音楽的なことのみではないが、子どもの前で表現することの一つとして音楽的な演習を「教育実習指導」の授業内で取り上げていくことは、実習に向けての準備として意味がある。

3-5 「音楽演習(器楽)」(全年次選択/児童教育コース・幼児教育コース/三ッ本担当)

科目「音楽演習(器楽)」は、弾き歌いに必要なピアノ演奏の技術と音楽的表現力を身につけることを目標とし、「子どもたちに、音楽の楽しさを伝える力」「歌唱力」「ピアノ演奏技術」「聴く力」「読譜力・視唱力・聴音能力などのソルフェージュ力」「楽典の知識」を育成する。

1人当たり10分~15分の個人レッスンをを行い、それ以外の時間は、各自キーボードを用い、自習する。履修を希望する学生は、履修登録期間に履修希望を出し、希望者が多い場合は、抽選により受講者を決定している。教材は様々で、学生の習熟度と嗜好に合わせ、教員と相談し選曲する。

<他科目との連携>

学生は、同じ学期に平行して、「音楽」「教育実習(幼・小)事前事後指導」「初等音楽科指導法」などを履修していることがある。その場合には、それらの授業で必要とされる弾き歌い課題曲などを、この「音楽演習(器

楽)」の個人レッスンにおいて支援できるよう、教員間で連携をとっている。

また、各学生の「教育実習」や「保育所実習」、「教員採用試験」などで必要となった曲を教材とするなど、学生のおかれた状況を把握しながら、柔軟に対応するよう心がけている。

<実践例>

『うみ』（林 柳波 作詞／井上 武士 作曲）を題材として、その指導内容の流れを〈表5〉に示す。

表5. 科目「音楽演習（器楽）」における『うみ』の指導内容の流れ

活動とねらい		教員の言葉がけ
①	歌詞の朗読を通して、言葉の特徴に気づく。 <ul style="list-style-type: none"> 「子どもたちに分かりやすい言葉が使われている。」 「七五調である。」 「『ひろい』『おおきい』『しずむ』など2音節目にアクセントがある言葉が多い。」… など、学生たちが自由に述べる。	「まず、『うみ』の歌詞を、言葉を味わいながら声を出して読んでみましょう。」 「何か気が付いたことがあれば、述べてください。」
②	メロディーラインとリズムに沿った朗読をすることにより、作曲家の感性にふれる。 <ul style="list-style-type: none"> 歌をうたうには、言葉に対する感性や文学的素養も必要である。日頃より読書などを通して、その感性を豊かにしていくことの大切さを伝える。 	「次に、歌のメロディーラインとリズムに沿って朗読してください。作曲家が、この詩をどのように読んだのかが、察せられます。」
③	情景を思い浮かべて気持ちでうたう。 <ul style="list-style-type: none"> 思いを声に乗せてうたうことを経験する。 プレスの時に、海の壮大なスケール感と内なるエネルギーを身体に取り込んでからうたい始めるなど、表現につながるテクニックを経験する。 	「思いを声に乗せてうたうことは喜びであり、歌をうたう醍醐味です。海の情景を思い浮かべて見てください。どこまでも広がる海原、遙か遠くに見える水平線、波が砕け引く音、海鳥の鳴き声、潮の香などを感じてうたいましょう。そして子どもの頃、目の前に突然海が開けて見えた時の純粋な驚きをもつてうたいましょう。」
④	発声練習を通して健康な声を手に入れる。 <ul style="list-style-type: none"> 童謡・唱歌をうたうのに相応しい声を目指す。 	「オペラ歌手のような大きな声やビブラートを聞かせた声ではなく、のどの開いた、明るく、伸びやかな声でうたいましょう。」
⑤	拍子の理解 <ul style="list-style-type: none"> ゆったりとした3拍子と、舞曲のような3拍子の違いを理解させる。 	「さて、この歌は何分の何拍子でしょうか？」 「『うみ』はゆったりとした3拍子の歌です。『ふるさと』『おぼろ月夜』『冬景色』も同様の名曲です。ブラームスの『子守唄』のような安らぎと安定感をイメージしてうたうとよいでしょう。これを舞曲のような3拍子でうたっては台無しです。」
⑥	曲の構造と表現のつながりなどを発見し、自分の意見を自由に人に伝える。 <ul style="list-style-type: none"> 「歌の前半と後半の4小節のリズムが全く同じで、素朴さと安定感を感じる。」 「メロディーが結構ジグザグしていて、海の波を連想させるかのようだ。」… など、学生たちが自由に述べる。	「ほかに気がついたことはありませんか？」 「冒頭の3つの音は上から順次ゆったりと下降し、第2小節の1拍目の跳躍による緊張感が『ひろい』というキーワードと相まって説得力を生んでいます。また第5小節・3拍目の跳躍で視線が空の月へ上がり、第7小節に向かって順次下降して、夕日の沈む低い空へ導いているようでもあります。」
⑦	ピアノで弾き歌いをする。 <ul style="list-style-type: none"> 「うみ」はゆったりとした3拍子の上に、海の雄大さと海への素朴な心情がうたわれているので、左手でゆったりとした深さと広がり表現しなければならないことを伝える。 ペダルの使用も試みる。 	「まず、ピアノで伴奏を弾いてみましょう。」 「左手はよく広げ、離れた音をスムーズに弾きましょう。」 「前奏は的確なテンポで曲の雰囲気を作り、実際に目の前に子どもたちがいるつもりで、語りかけるように弾き歌いしてください。」

3-6 「音楽演習（合唱）」（全年次／児童教育コース・幼児教育コース／三ッ本担当）

科目「音楽演習（合唱）」では、合唱音楽とそれを作り上げる作業を通してハーモニーを味わい、豊かな心を育み、生きる力を養うことを目的にしている。音楽の基礎的な知識・発声法・歌唱力を身に付けることは勿論、合唱活動の中で各自が責任を果たし、協力し合い、ひとつのことを成し遂げる体験をすることにより教育・保育の現場において必要とする能力を育成し、人間力を高めることを目指している。

また、童謡・唱歌をうたうことで日本の文化に触れ、伝統的な美しい日本の言葉と音楽の一致を味わい、本学の根幹であるカトリック精神に基づく宗教曲にも取り組んでいる。

<他科目との連携>

1年次の「音楽」の授業や、2年次の「初等音楽科指導法」において、唱歌・童謡の弾き歌いや指導法を学んだ学生が、さらに、曲への理解を深め、仲間と共に豊かな音楽経験ができるよう配慮している。

また、「音楽」や「初等音楽科指導法」では取り扱わないハンドベルの演奏にも着手することにより、ハーモニーへの関心を高めるとともに、読譜力・視唱力・リズム感・聴く力が定着するよう指導している。

4. 連携における今後の課題と対応

4-1 在学期間をとおして音楽技能の維持と学びを継続できる環境の用意

授業で練習をしてできるようになった「あそび歌」や「弾き歌い」も、履修期間が短いために定着しにくく、また、繰り返す機会がないために、数年後にはすっかり忘れてしまうということがしばしば起こる。とりわけ初心者には、一度できるようになった「同じ学習曲」を、いろいろな形で繰り返せる場を用意することが、大切であると考えられる。繰り返すことによって、「この歌なら、いつでも現場で使える」と思えることが自信となり、積極的な音楽技能の活用にむすびつくとと言える。前述の「教育実習（幼・小）事前事後指導」のような連携の場を、今後も強化したい。

4-2 音楽以外の科目との連携

幼児の音楽活動は生活と切りはなされることなく、日常生活の出来事や興味・関心と結びついた形で柔軟に流動的に行われなければならない。学生自らがそのイメージを持つためには、5領域について学ぶ科目を含む、音楽以外の他の科目との連携が不可欠と言えよう。絵本を使ったり言葉を遊んだりする音楽活動は、「言葉」の授業との連携が考えられるし、楽器を作ったり形を音にしたりする活動では、「造形」の授業との連携が考えられる。また、ダンスや身体表現などの活動は、「体育」の授業との連携が考えられるだろう。今後、さらに指導教員間での相互理解、情報共有を深めていく必要がある。

4-3 ピアノ弾き歌い指導の改善（必要に応じた簡素化／経験者の差別化）

2年次以降の音楽関係科目との連携をスムーズにするために、1年次「音楽」で、リズム楽器や身体表現の活動、理論学習などをバランスよく組み込むことが望ましい。

川口が前回までの研究（川口，2017）で取り上げてきた「入学までのピアノ経験差」に対応するための改善が、引き続き必要である。ピアノ初心者に対しては、伴奏法のさらなる簡素化が望ましい場合もあるだろう。たとえば「右手で歌のメロディを弾き、左手でコードのルート音（根音）のみ、または根音+5度音のみを弾く」といった方法の提示などである。一方、ピアノ経験者に対しては、個人レッスンが受講できる選択科目を紹介するなど、より豊かな表現力のある弾き歌いに積極的に取り組める環境を用意する必要がある。

4-4 ソルフェージュ指導についての連携

4年間を通じて、複数の音楽関係教員が関わっていることから、ハンドサイン（ドレミを身体で表す方法）やリズム唱、指揮の方法、移動ド（その曲の持つ調性により、ドの場所を移動させて歌ったり考えたりする方法）と固定ドの取り扱いなどについて、音楽担当教員内である程度の統一性を図ることが必要である。実際、

子どもたちの現場で取り入れられている方法はさまざまで、柔軟に対応する必要があると考えられるが、少なくとも在学中は、学生を混乱させることなく、統一した方法でソルフェージュ力を育てていく方が効率的であろう。

5. おわりに

この度の共同研究をとおして音楽教育における「科目間連携」を取り上げたことは、さまざまな音楽的背景・能力レベルを持つ学生の多様性のみならず、音楽に関わる私たち教員の専門性や音楽の多様性をも再認識するきっかけとなった。

音楽能力はそれまでの習い事やクラブ等の経験によって、学生達の入学時点での能力差が大きくなりがちな分野である。それでもなお、それぞれの学生達のレベルや好みに応じる形で、ある程度の技能を習得させてこそ、将来の現場で積極的に音楽を取り入れる原動力になるのは言うまでもない。私たち教員もまた、従来の「技能の習得」という西洋音楽や音楽教育専門家にありがちな枠をはずした音楽活動の見直しを、さらに続けていかなければならないだろう。

彼女たちが現場に出た時に、「1つの園の中に、造形が得意な先生もいれば、体育が得意な先生もいる。そして、ピアノが得意な先生もいる。行事の時には、ピアノが得意な先生が演奏を担当する。ピアノが得意でない先生は、あまり弾かないけれど、歌が得意だからいつも歌いながらいっぱい遊んでくれる。」……そのようなチームプレーが行われることを期待したい。「ピアノは苦手だし、音楽には自信がない。そして、いつのまにか音楽的な活動をしなくなってしまった。」ということにならないような、柔軟な養成校の教育活動の試みを続けていきたい。

参考文献

- 1) 川口潤子著『初等教育学科「音楽」におけるピアノ指導の現状と課題 その2』白百合女子大学初等教育学科紀要第3号（2017）
- 2) 文部科学省・厚生労働省・内閣府『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本』チャイルド本社（2017）
- 3) 宮崎新悟・志民一成共著『平成29年版 小学校新学習指導要領の展開 音楽編』明治図書出版（2017）

【英文要旨】

Our study addresses the coordination of music education classes (both music and non-music) for child education majors. This inter-subjective teamwork intended is to meet the directive issued by the Ministry of Education and Ministry of Health, Labour and Welfare on “The Course of Study for Kindergarten (or Elementary School)” and “Guidelines for Nursery Care at Day Nurseies.” An actual example implemented this year is that the faculty members had each student use “the same tunes as her material” in several music-related classes throughout their college years. She could then continue to practice and polish her accompaniment skills in a deeper, longer, and more practical manner. Our next step will be to examine the coordination of non-music courses (physical education for dance, art for crafting of musical instruments, etc.).